

13
2945
22

目録
花
壽

鎮西八郎椿説弓張月拾遺卷之四



第五十四回

東都

曲亭主人編次

海棠を砍て為朝露雲を見る

和勇を撃て鶴亀阿公を逐ふ

大里の按司八郎為朝。その夜より更闌て陶松壽が慌しく。東風平
より来つる。やうこそあらむ。とおほせし。臆て閑室へ招れ入て。對面
する。松壽と寒温を述ゆ。あを忙しく小膝坂とて。某かく
空山中にまゐる。別儀あり。おのれ所あるをりて。豫て南風
原の城。間諜者を遣し。おのれ事の為体と窺せし。その日の甲夜
お走り来て。城中に如此くの密計あり。明日は諸按司の拜賀ふ
る。代托し。八郎按司。下官と撃つ。んとて。りつら。准佐と

二十九日

昭和九
七月九

抑利勇の幼主を挟みて。按司の號令に權勢をさく國王
 小異なるとも。その智においては。懼るに足らば。所謂沐猴也と
 冕とるものなり。加旃羊耳海棠が色も。爾と事なれを殺し。身
 の樂こと。あをりて。上の君真物も。祐らんと。下の國人も。從ふ。只
 生ながら。その空を。啖んと。のさめあり。かれが。彼が。謀ふ。よ。て。謀を
 行ひ。この便宜を。めて。速に。利勇を。誅戮し。民の塗炭を。救ひ。めん。と
 頭を。は。して。私語。為。朝。て。嘆息。し。ら。れ。よ。よ。と。い。ども。
 王子の。仰。を受。て。して。恣。大臣。殺。さ。ば。叛逆。の。罪。脱。れ。が。と。ち。ん。縦
 大臣。十二。か。部。して。それを。害。せん。と。謀。る。もの。ゆ。づ。り。計。策。を。た。す。ふ
 よ。か。か。人。只。病。を。假。托。て。ゆ。づ。れ。あ。い。さ。う。さ。る。べ。し。と。い。ひ。の。外。は
 回答。めん。が。松。壽。亦。不。申。す。は。ら。く。和。漢。の。例。を。推。し。藤。の。鎌。足。入。鹿

を誅し。漢の王元董卓と殺す。是れは。教命と。稟。を。お。あ。り。て。苟
 も。その。謀。君。不。忠。あり。國。中。利。あり。大臣。なり。とい。ふ。も。放。さ。る。ま。き
 る。め。先。さ。ると。い。へ。人。を。征。し。後。お。と。い。へ。人。を。征。せ。ら。れ。さ。く。は
 こ。ろ。を。決。し。め。し。と。勸。ふ。ふ。為。給。る。は。美。し。く。と。浩。然。と。鶴。亀
 へ。事。の。越。を。竊。聞。し。て。屏。風。の。背。より。走。り。出。按。司。を。殺。す。この。佞。人。の。ま
 謀。れ。め。ひ。そ。某。兄。弟。の。許。を受。て。す。松。壽。の。首。を。刻。不。忠。不。義。の
 罪。を。糾。して。去。り。て。後。は。國。賊。亦。を。討。滅。る。に。し。つ。ひ。も。あ。く。を。劍。の。鞘
 を。握。り。固。めて。左。右。より。挟。み。ま。は。ら。は。破。伏。せ。んと。目。上。ら。か。く。蓋。ひ
 か。れ。を。松。壽。の。騷。ぎ。し。れ。氣。も。な。く。又。之。を。か。か。り。冷。笑。ひ。こ。り。小
 賢。な。太。郎。金。亦。が。不。忠。喚。つ。り。それ。不。元。耳。一。臭。の。罪。に。し。物。を。ね。めて
 過。さ。ま。とい。の。せ。も。果。を。同。胞。齊。一。声。を。あ。り。ま。す。父。を。足。掛。り。あ。



鶴亀夜

松壽

疑

武藝の師あり。且當初父が吹挙よよんで里之子に奉れよる小恩を
 宣して恩をせらるるを義を忘れて勢ひ小就き。利勇に媚渎ひて忠臣
 を殺せり。その罪一。亦王女は母子の中城を落るるを法廉夫人
 が御子牛一すわらせ。姑場の山里に居て。情なくも御子を殺し其罪二。
 亦查國吉と共王女を救ひ進ませざりし。意中ハ奸計めれり。この
 故ハ查國吉ハ忽地翼を失ひて討死せり。その罪三。この三の罪ある
 に。誰ハ不忠不義といひざらん。吾們王女ハ夫婦の仁慈よよんで。年来
 この城中のあり。汝が世ハ死なれど。形勢を見せく。毎ハ齒を切ること
 既ハ久し。あつれども君父の仇ハ利勇といふ。誓ひざれば。緯の破き入る
 をぞめて。曩ハ佳奇呂麻ハ汝を窺ひ。かろくしく手取らざらん
 といひ。かくても脱る路ありや。といひたまき。なごり。枝かふる。刃よとれそ

荒余うち笑を。縁故をあらざれば。その疑ひハ理なり。この件のことハ
 法きてハ胸をうらなれ。ゆめもあら。をり。汝は寧王女ハ告せり。から
 せんといふ。言ハ漏易きをりて。まごや。八郎按司も。せられ。じ
 某不肖なりといふ。争ハ廉夫人を害し。あふ。き。僕れ。と。や。あ。六
 年。に。り。ね。夢。の。迹。世。ハ。只。苦。場。の。山。里。ハ。利。勇。ハ。軍。兵。充。満。て。脱。る。か。と
 も。懸。小。王。女。を。落。し。は。わ。せ。ん。と。て。さ。ら。に。刃。に。伏。多。し。廉。夫。人。の
 小。首。級。を。多。り。て。利。勇。が。屯。を。解。し。その。ち。越。来。の。石。橋。を。討。死。し
 る。死。首。級。を。死。首。級。り。て。寧。王。女。の。小。首。級。あり。といひ。に。し。ら。ん。奸。智
 に。長。く。利。勇。ハ。欺。く。苦。心。と。一。朝。ハ。説。き。じ。と。あ。る。に。王。女。ハ。存。命。て
 佳。奇。呂。麻。ハ。在。る。は。ハ。八。郎。殿。の。訴。え。り。て。利。勇。ハ。ぬ。く。松。壽。を。疑。ひ
 忠。義。め。り。て。王。女。を。迎。へ。密。に。これ。を。毒。殺。し。ま。て。松。壽。も。殺。さん。と。い。ふ。う。く

計校せん。その氣を以て措きたり。さうして寧王女を救ひ進み
 へりやと。さうなむかうさぬも。おのひう終つ。佳奇呂麻ふ起き。
 王女小拜湯くまればおのひまぬ面敷まで。じしあ似あつど。かくて
 利勇が毒計を脱れりんと。容易し。とじてめて公おちか。か。やぐ
 南風原の城。冊き入れ。お果し。利勇が疑ひ解。君臣恙なれと
 をおろり。亦某年。利勇に暗殺ひ彼が門の狗とありし。先師毛按司
 の送訓あり。查國吉と共死ぶ。り。始終の忠義を。入。なる。さ。さ
 查國吉の杵。旧義を。りて討死。松壽の程。嬰が忠。字。りて。阿容く
 と。雙言ふ。従。彼。ある。の。いと。多く。これを。ある。の。穢。なる。ゆ。は。國。家
 ぬ。び。興。らん。と。と。若。り。の。の。乱。と。ぬ。る。世。の。あ。忠。臣。義。士。なり。と。
 いひ。けて。目。を。押。拭。へ。今。す。て。い。と。め。れ。鶴。亀。も。刃。を。お。さ。め。て。嘆。息。し。

いふべきこともなかりけり。折しもあれ。王女ハ屏風をかみやりつ。あもさ
 て。為。朝。の。傍。に。侍。り。襟。き。め。の。し。て。松。壽。の。對。ひ。東。風。平。按。司。の。心。操。さ。ら
 あり。ほ。ん。と。と。ひ。な。ら。う。廉。夫。人。を。替。なり。し。と。年。疑。ひ。と。れ。や。ら。ぬ。
 今。宵。鶴。亀。ふ。さ。や。れ。て。その。胸。中。に。撈。え。る。に。足。下。の。忠。義。を。ある。の。こ。ら。ぶ。に。
 つか。身。に。斬。り。落。さ。ん。と。て。み。づ。う。う。刃。お。伏。ま。ふ。母。廉。夫。人。の。仁。慈。の。く。そ。は。し
 かに。磯。の。浪。あ。り。き。歎。れ。お。沈。に。し。なり。寔。お。松。壽。微。り。せ。ぶ。つ。が。身。を。さ。ら
 かり。鶴。亀。も。矇。雲。利。勇。が。ま。に。死。る。ん。毛。國。典。なり。松。壽。の。查。國。吉。の
 時。を。お。し。蝸。牛。の。角。の。五。ひ。中。山。山。南。山。北。と。と。つ。お。つ。れ。この。國。の
 浪。の。鼓。の。何。の。耐。ら。も。お。さ。や。ん。と。む。ろ。の。袂。を。顔。に。押。當。く。ま。ん。ば。
 浮。海。の。目。と。目。の。め。し。い。と。を。念。も。す。と。雄。が。林。示。め。う。ひ。て。い。る。ふ。



為朝の謀
孝子仇を
殺そ

春の月長月合戦



排諷月別片拾遺卷之四

ちやめあふ。時刻を定めりつれば。陶松壽もあはし比及ふ。東風平より
 多ありつ途。是彼ひとりなる。西按司豊次並て。いよ路をいそがし
 徳々南風原の城へ入り。多くは應雀呂緑出む。久て正殿へ誘ひ。彼花
 籃。あふ車。つつけり。為朝と。つらその綱を合。徐ち歩。あふ人
 松壽も。その後方に。跟く。廊を過れ。とれ。左右。帷幕を垂れて。人あり
 とおほ。れを。尻目。あけつ。ま。り。も。い。み。入。れ。ふ。正殿の翠簾
 捲あ。げ。し。阿公の王子と抱きて。高座あり。利勇。その次。せし。緒按司
 と北面して。二帯。居。み。れ。り。そのとれ。為朝。王子と拜せ。んと。して。松壽
 を。信。と。え。り。多。く。松壽。の。ま。つ。ら。ら。ひ。て。劍。を。引。抜。れ。お。か。ら。ま。く。
 前。ふ。ま。り。る。意。雀。と。只。一。打。お。破。仆。せ。り。利勇。阿公。ホ。大。き。お。驚。れ。る。奇。怪
 なる。狼。藉。あり。お。も。出。よ。と。鳴。せ。も。あ。く。と。鶴。龜。の。身。甲。あ。て。花。籃。の。中

より。跳。り。出。刃。又。閃。し。け。り。利勇。を。撃。んと。競。ひ。菟。も。利勇。の。ま。ま。と。周。章
 ち。て。更。お。敵。と。り。お。及。び。身。お。お。し。て。逃。れ。と。ま。を。同。胞。左。右。より。引。抜。ま
 透。回。も。お。撃。け。ど。利勇。の。脱。る。に。踏。み。て。劍。を。り。り。受。と。り。え。
 二。之。合。戦。ひ。が。孝。心。癡。る。同。胞。が。陽。の。劍。を。挂。う。ひ。初。太。刀。の。鶴。二。の
 太。刀。の。龜。が。踏。こ。み。鋒。さ。が。り。に。左。右。の。隅。破。割。れ。腎。居。子。撞。と。ゆ。り
 を。起。し。も。ま。ど。跨。う。と。中。城。の。按。司。も。國。計。が。子。ど。鶴。龜。先。考。の。寃。を
 聖。め。國。の。為。お。逆。臣。利勇。を。誅。と。り。と。鳴。け。て。や。ぞ。ぞ。首。を。う。れ。る。を
 その。隙。お。為。刃。の。只。一。懸。に。呂。緑。を。切。伏。せ。血。刀。引。提。く。ま。ま。入。り。松。壽。の
 王子。を取。す。か。ん。せん。と。て。阿。公。お。お。れ。れ。が。阿。公。い。よ。慌。忙。に。逆。賊。松。壽。
 王子。お。殺。し。ち。お。れ。や。と。叫。ぶ。松。壽。の。お。り。の。び。と。あ。く。入。り。阿。公。お。り。と
 身。を。交。り。て。引。と。ら。れ。る。袖。あり。放。左。手に。王子。を。抱。き。そ。え。く。喘。く

逃に去りれば松まつ喜きのさらなり鶴つる龜かめのは母ははの仇人にぎ脱だつはじとて鳴なとあく追蒐しゆ
 ころりのさらなりがら為なるらぬら松まつ喜きをと捕とらへんとてて帷い幕まくの内にお隠かくひらるら流りゅう登と之し
 亦またのあひづ号ごう觀くわん齧がて出去りと失ひ且為なるら初はつの武勇ゆう今いまにはじりどその猛勢せい
 亦また辟へい易いしてこも悉しつく降参さんと況て緑高こうき按司し親しん雲うん上じやうりひがひられ
 里さと之の子こ亦また至いたるらを以て叩れ拜伏ふくして吾われ侪たいえ未野の公こうはは王わう女にょ八はち郎らう
 君きみのおんが為なるら不ふ忠ちゆう信しんを励しし命いのちを助多たしとて勸解げんよければ為なるら朝あさ
 かられ徒を殺さと汝なん連れん固こ小せう先せん非ひを悔て固小せう忠ちゆう義ぎを竭きんとならば
 こも阿あ公こうを追ひとを兄王わう子こを恙なくとり多たしとて過半くわんの中には
 これの淫婦ふ海かい棠たうを捕んとて弓箭やを手杖てうと流登と之しを殺すと彼かれに索さく
 多たしとて海棠たうの紅粉こう樓ろうの欄子らんにお月げつを倚り死の氣を眺めたり為なるら朝あさ
 こらら流登と之しを殺すと樓ろう上じやうに走り登り多しとえかりけく冷笑れいひひ

衝つと身を起て欄より飛りんととる処ところを為るらぬら弓きう箭やを刺ひてよら
 一ひ彈だんととららぬら窟くわくとらぬら海かい棠たうの細首さい井せいと射きり多たしとて怪しき
 ぬら残まごはより黒き隠れとまのほり煙けの中に老きれ法ほう師し忽と然ぜんと立
 わられ呵ととららぬら笑わらみ声ももに朦朧もうと形の消てなり多しと為なるら
 この形か勢せいに弓杖てう衝つと信とあらますとて海棠たうの矇雲もうんが幻術げんじゆつのこもと
 所ところ彼か禍わざはひ獸けつ小せう異い心しんに罪なれ夥たぐひの人を殺すと妖よう法ほうかりしと宣のたまへと衆しゆ皆みな
 げありととあひあひして坐ざ小せう舌ぜつを掉ひ多しとさらるら行ぎやう小せう陶たう松そう壽じゆの走るら阿あ公こうとて
 追お追おんとて廣ひろ庭てい小せう跳とり出るらと生茂せいれ樹を隔られてあららぬら
 ならば阿公こうの老きれもも不ふ健けん母ぼりゆて足いとをやく王子と抱ならぬら
 麴このこ樹この間まを走り繞るらほと小せう松そう壽じゆの忽心しん地ち母ぼの往方ゆくへとえりみひひ
 こららなく焦燥せうと樹の枝を推すら草くさをふりた拂はひけく索れり子こ



遂お姫さびこれをもえぞからし経ふ鶴亀ハ仇人利勇を奪とらん怨
 へおさじ阿公と申脱さじと早雄のそや瀬ふあてゆく水と堰もか
 ころころして同胞あつと失ひ筑藩の外面へ走り出れ折しゆめれ
 城溝の中に水音と稚見と右手おさじめげ潜り出るりのありまを
 ころ阿公なりとえてたれば落し江の樹蔭お鯨ひ龜をゆきさたさ
 を伏て俟とらあ髪ふり乱と鬢のおられ毛かたあげて隻手に綾
 綾の衣賢い君よ啼泣あまのいさ懐へと抱き入れて濡れさるすに
 ゆくゆる迹と濁とど未ださく岸の小細竹をらら草身と跳ら
 ちて這ひ登りゆらんととれおひもかけと眼さくらう見くん龜
 刃を跳りこえ亦ありのあられ右手の膳丁と突く手煉の美法叶
 若とむりの二足之足遠巡ぐすを奪せとて阿公やらねと叫がる

鶴の一声驚くこと久くおぼから打かゝる阿公が鉄鏡を刃の鞘に受
とめてもさうな仇人のいらさやく。水際の方のいと暗く。藪に
中に飛び入りぬ。

第五十五回

按司と會しと為朝暎雲を討
城郷を捨て賊將首里に走れ

為朝既小海棠を砍て樓上をとり入りへ松壽鶴龜を諸按司親雲上
ホとともひに討り討つ吾們八方おこつて阿公と追出んとされぬ。件
悪婆と王子と抱き城の濠門より脱と去り往方もあれどありてぬ。
すうはゆそ為朝ゆて眉うち聳ゆ。阿公は原足貪林女を愼の老婆
なり。這奴脱と去りとも何はどのさうあらん只忽とあがらぬ王子の
うなり。阿公は敵地お走りて暎雲が賊兵お捕られ王子は不虞のさ

あゝ誰が為あり我兵お揚べきこれか患れ所なり。諸君ふとひ
部して王子を索すわらせまんととくといそしめ人の衆皆異口同音
あてまうにやう。そのさゆくる愁ひもひそ。王子の妃腹くとせ
ども。實にお出定りするに且按司を先王の駒馬にして寧王女乃
良人なり。はしや王子在ととも。暎雲を討りぬ。孰うその後、あ
ごととまうさん。されば吾儕の王子の往方。あれざるを愁とせ。只暎雲
が滅がるは患とと。すべし利勇が貪り貯へる。賊宝を散して窮民を賑
山南をうちおさめて暎雲を滅し、まらんゆこそ願くゆと。言語を
盡して諫か。為朝ちうら及とて且くその議おとさぐひ。さうから
城中おらちめづりて罪なれ囚徒を放出し。宝藏をひらして積る所
の金錢を所司軍民おまこつらちへ亦罪す。て利勇が為よ殺さ

されりの。妻子代賑一多ひしふ。まよその仁信不感激。枯れ
 稿の雨おのひ轍の鮎の淵お入るこらして。飲ぶと眼りま。此君
 の為ならん命も後てをしうらば。そく矇雲を討ま。城濠の埋草と
 なるまでも。高き恩あふ報んと。さるりのなりのけ。か。し。行お
 為朝の利勇が苛法を去て賞罰を正しく。遂お鶴を大おと。龜を
 副おとして南風原の城をさ。かのく由断なく。王子の往方を索
 ち。るべはしを。えお。て。松葉を東風平へ。さ。じ。次の日大里へ。ち
 かりて。ありし。も。お。ち。も。なく。王女お。か。り。ま。ひ。し。る。王女を
 緯の越をつぐ。と。ら。ち。ま。て。一。と。び。の。利。勇。が。族。滅。せ。れ。し。と。こ。ち。は
 とし。亦。一。と。び。の。王。子。の。往。方。あ。れ。ざ。ら。ぬ。い。し。は。ま。じ。く。お。ひ。し。る。と。
 かくて。乃。軽。の。間。切。毎。お。夢。さ。し。て。王。子。の。往。方。を。さ。ら。ね。ま。か。り。せ。亦

首里お間牒者をはつり。阿公が所在を。定めんとし。あ。お。月。日。の。こ
 い。づ。ら。に。行。お。た。れ。ど。王。子。の。往。方。を。さ。ら。ね。ま。は。し。な。く。そ。の。年。も。暮。れ。て
 春も。途。を。ま。な。り。し。く。南。風。原。東。風。平。より。松。壽。鶴。龜。木。連。署。し。て。
 人馬既よそのひね。諸方の按司お牒。あ。し。て。矇。雲。を。討。ま。と。勸。る
 お。為。朝。と。時。る。海。を。や。し。と。の。こ。回。答。し。て。か。ら。ぶ。し。く。動。き。た。ま。ら。ぬ。
 王女この形勢を。い。ひ。が。ひ。な。し。と。お。ひ。ま。あ。お。と。か。く。し。て。今。茲。も。亦。九。月
 の下旬あかりの。れ。が。為。朝。俄。頃。お。軍。議。あり。と。觸。ち。し。て。大。里。の。城
 お諸按司を會集。ま。へ。東。風。平。の。按。司。陶。松。葉。南。風。原。の。守。將。鶴。龜
 小緑の按司儀翰。八頭山の土官田平。お。こ。じ。め。て。こ。ま。こ。の。席。お。興。さ
 がる。りの。お。り。り。り。その。と。れ。為。朝。の。扇。を。笏。お。把。て。の。さ。ま。あ。や。う。こ。れ
 を。か。ら。ぶ。も。こ。の。土。へ。漂。忌。の。亂。れ。あ。あ。を。り。て。國。王。の。女。塔。と。呼。ぶ。

の備めをべし加之山路羊腸にして兵をよそめがじりらるる直水
 攻入るんとされとれハ夥身方の士卒を失ひて勞して切をばがらるん
 愚按をりて謀るとれハ大里ハ智勇の大將をのじおれ君ハみつら
 諸按司をばりて竊ハ川良の津とこえ梓嶽の麓より僕り出て急
 浦添の城を攻おし宜野湾美里の地を畧し北より南より
 向ひ長く驅て首里を攻めり矇雲とて城を出て戦を決を
 色しそのとれ大里ハ矇りのさまのりとれ身方の大將二三百の逞兵
 をばりて山路ハつひ登り火急ハ敵の背を襲り矇雲幻術ありと
 いふとも前後ハ敵をうけて防に不為なく忽地橋とつれを
 ぞて辨舌らるるがごとく述べければ衆皆驚く嘆賞し謀と
 惟幕の内よめがじりして勝ことを千里の外ハ決するの妙策とるべし

と稱しがが為朝やぐてこの議ハあさぐひさて誰をうこふ物しとら
 て敵の背を襲とべたと同多人ハ松妻亦もらハ中ら務電を奉るは
 ころけれとこの智勇父毛國將ハ風ありこの同胞小中らりのあれべ
 かふと答まらせら務電はて飲を矇雲ハ君父の仇なりとまて逆
 賊退治の時ハあて小雲射なりとも後れん願ハかふと吐けを
 為給えりてらら美ひ進ゆも退くも忠義の為なら誰うら且
 臆ハたりとせん志ハあれと進むを飲ひ退くを厭ハ勇士のつゆあり
 又れらの同胞をりて先陣とてあめんと豫ハもどハ定められハ列よの
 人を擇むへし王女ハつ前妻白雉ハ君ハよんて智謀勇力とて男
 小恥ぞ且士卒の敬とれこれハこれとらりのヤハあれがれハ王女
 をりて搦手の大將軍と敵の脊を襲とべし為朝ハ我兵ハ起とふ

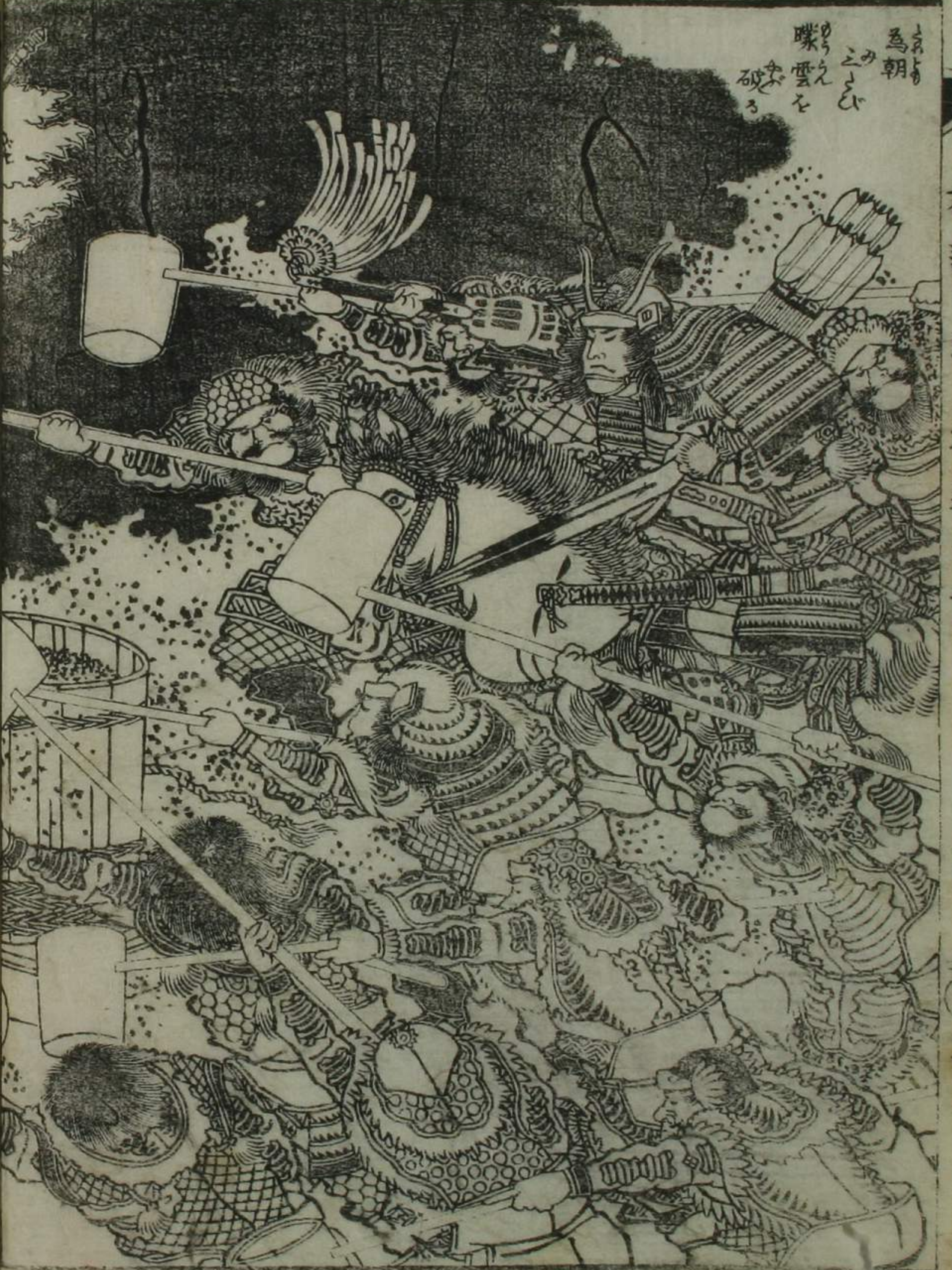
春紀より長月合貫卷之四

兵糧小乏なり是ニツル亦仰て天文をくねふ為朝が命運し事
 竭せかれればこそより彼を攻るも益なきとあま為朝この秋の田租と
 あまめ果るとしちして首里を攻んと議せられたるに汝も豫てこのころ
 を好よと説示せしが九月の下旬ふ至りて朦雲の亦棟孫全廣亦を
 集合せしめり。曩も説諭せしごとく既ふ為朝が軍議一決して攻
 よせんとして然る且夕に及べり彼為朝ハ利勇が儔あふは且陶松
 これを翼てあく謀るものごとくをりて王女と擗子の大ねじ大里の山
 踏み越て不意ふつが背を襲んととをくれどもつがこの千里眼は漏れ
 ことなれば更ふ怖るに足らぬ棟孫はよく浦添舟走向ハ奇律之
 と宜野灣とあり全廣ハ五百騎をばね那覇の港口の浦曲と繞り
 小祿の此石を攻むとして南風原の城を抜た嶋袋のこに火の發せられ

んが軍兵を二隊あつて東風平大里の城を乗とり直母王女が背
 を襲り一戦母して擒あをて亦棟孫奇律之亦を為朝を柱て且く
 戦ひ勢ひ竭せられおりちして城を捨て乱走し敵をこやと誘引
 してこれおのづから謀ありと説示せば衆皆欣然として領堂に
 法君かた神没不測の妙計あり為朝王女を擒せんと何の
 疑ひくゆべれと祝しをのこ出陣せりさう経本為朝ハ鶴亀先
 鋒として浦添の城を攻よせまへ城の大將之司官棟孫数百の賊
 兵の引卒し城ををるること十餘町母してこれを迎戦へ鶴亀真
 先小馬を出し棟孫と戦をまぐ左右より刺しつれハ棟孫竟に
 敵ハ仍ど馬小拍りれ逃去れ為朝を賊軍の乱れをえて士卒と
 進め勢ひ潮の涌がごとく去づれば路を遮りまへ棟孫ハ懸小城中

朝、術、勝、言
 倍、能、行、
 以、汚、物、
 注、
 七、
 加、
 七、
 七、

為、朝、
 破、
 破、



春、八、月、長、月、合、夏、元、日、四

本、言、日、月、才、文、卷、二、四

へんんとせと豫と謀りしむなれば首里に投てぞ敗北をかくし
 後不為朝と輒く浦添の城を落し長く驅て直に宜野湾に攻ん
 ころその夜の具志川に屯してあはし人馬の足を休め東雲引渡そ
 比及おまづ行候を以敵のやうに窺ひあふ宜野湾の賊將奇律之
 を浦添の落城に膽を冷たりたり夜の中お城をよて引退れてゆと
 注進を為朝これを坐てうら笑ひ烏合の賊軍つふ武勇をせおし
 戦をして逃走をさもあふんさもありなん今の背おふ敵はしこの
 処より首里まで里数いくとくうあはれと向まへ鶴亀ひさしく
 ともみ出ころより首里へ遠くは宜野湾の西南に龜山あり。あの
 処より首里に属する龜山の麓に末吉と唱ふ末吉の南に西儀保
 あり。朱平村の北をなべて儀保と喚ふせり。儀保を越せば赤平あり。

赤平に石虎山あり。みなこれ龍宮城の北に當れり。そへ石虎山と
 取りまづ城を攻れ不便なるべしと回答しかば為朝あはれと
 ぬらむ軍兵の手にてはやぐて龜山ふとみ入りのまへ松本疎
 てまうらひやう。隈雲の漢の張角が流舟してその幻術量ぐじあふ
 棟孫奇律之ホ城を捨て走りしむ。ふに謀あはれあふ。再三
 賢と廻るさるべうりやと練しかば為朝坐てうら息取れもあ
 どのさうあはれ凡幻術をりて人の眼目と眩惑し種くの妖怪と現
 るとれ或は獸の鮮血或は人の糞汁を洒れかくれば幻術忽地破
 れりゆのぞり豫てこのゆとあはれ故に獸血人糞とて汚穢けのを
 夥の桶お貯て陣中お齎しあはれり。先鋒の兵おあはれ長く柄杓
 を准候しり。隈賊があはれ術を行ふとるるは速おはきかけ。

勢破るべし。と仰されハ鶴亀同胞の謀を受く。秋の水の決ごとく。
 亀山をうち踰は。末吉母攻かれハ棟孫奇律之一手みなくす。
 ちや破れハ防に戦ひら。かゝるどして引退くと鶴亀亦奮撃
 ちて。これを追ふこと甚急なり。その勢ひ破竹のどくならぬ賊の
 西將儀保も馬を駐めほど赤平さへ母うち捨く。龍宮城へ逃入
 ちる。



椿説弓張月拾遺卷之四 畢

